

幼児のためのよみもの(その3)



絵雑誌・マンガと子どもたち

本田 和子

◆幼稚園の門をくぐらない「本」の存在

絵雑誌やマンガは、今のところ、幼稚園や保育所では公民権を持たない存在、とでもいえましょうか、「絵雑誌って月刊絵本のこと？」と首を傾げる保育者の姿すら見受けま

す。それでいて、店頭に並んだ幾種類もの月刊絵雑誌は、附録ではちきれそうにふくらんだ姿で子どもたちを魅し、子どもの世界に入りこんでいきます。

熱心な両親の下で一

冊一冊検討されたいわゆる「良書」だけを与えられていた子どもの書棚にも、いつの間にか「たのしい幼稚園」「よいこ」などといった月刊絵雑誌がまじり始めます。そして、一度子どもの書棚に住みついてしまうと、続きものの強みとでもいうのでしょうか、何となく毎月後続部隊が現われて、いつかしら定期購入図書のリストにもぐりこんでしまう、そんなケースが少なくありません。

Sが、最初にこの類の雑誌を手に入れた動機は極めて単純でした。Sのお誕生日のプレゼントを選びそこねた年上のいとこが、たくさんのお録を間にはきみ込んでゴム輪でとめられている部厚い絵雑誌を、駅前の書店でふと手に取ったのがきっかけでした。その日は、贈り主のいとこ一しょに附録作りで大騒ぎ、翌日は、マンガや絵物語をひろい読みしたり読んで貰ったり、あるいはテストの頁を開いて一人で線を引いたり○をつけたり、とにかく二、三日の間その雑誌はいじり廻され、やがて書棚の一隅に押し込まれました。附録も大半はこわれて捨てられたようです。ですけれど、その次の月に父親のお供をして書店に行ったSは、同じ絵雑誌の翌月号を熱心にねだったのでした。二回目以降も、利用のされ方、興味の続き方は同じようなものでしたけれど、いつの間にか毎月Sの手に入る本になってしまいました。

こうして、月刊絵雑誌は、幼稚園や保育所という施設の外で、堂々と幼児の世界の市民権を獲得していきます。

今ここに、十人の保育専門家と十人の児童文学関係者と、そして十人の母親が集まったとします。

「絵本」という一つのことばが、刺激語として与えられたならば、これらの人々が描くイメージは、次のようにならないでしょうか。

保育専門家の中、七人までは「キンダーブック」「チャイルドブック」などという月刊保育絵本を頭に浮かべ、三人は「白雪姫」「一寸法師」などの保育室の書棚に置かれた名作絵本を描き、一人は「大きなかぶ」「ちいさいおうち」などという絵本を考える、という傾向がありそうです。

児童文学関係者たちは、十人が十人とも先ず「大きなかぶ」「ちいさいおうち」型のイメージ、同時に何人かは苦々しい問題として安易な名作絵本や附録過剰の月刊絵雑誌のことを考え、二、三人は大衆幼児文化の再検討といった意識で月刊絵雑誌やマンガに思いをめぐらすかもしれません。

母親たちのイメージはより混然としているでしょう。「白雪姫」「一寸法師」型、あるいは「のりもの画集」「世界の自動車」というタイプ「良書推選」で話題になった「ちいさいおうち」に頭を巡らす母親ももちろんまじっています。幼稚園から持って帰ってきて、毎月たまっていく月刊保育絵本のこと、あるいは毎月ねだられる月刊絵雑誌のおびただしい附録のことも、記憶のはしに浮かんでくるでしょう。そして、これらのすべてをこたごたと

思い浮かべる母親も少なくないでしょう。

子どもたちは、これらのおびただしい幼児向け出版物にとりまかれ、そのいずれとも各々にかかわり合いながら生きています。

保育専門家の念頭から奇妙に脱落しがちな絵雑誌やマンガとも、どこかで結びつきを持っているのです。

子どもの生活をよりよくみつめ、その発達をよりよく保証しようとする保育専門家や児童文学者たちの意識から、現在の自分と関係がないからといって、子どもの世界に蔽として存在し、影響力を持っているこれらの「本」の問題が、とかく薄れがちなのはちょっと不思議な現象ともいえます。

今日は、幼稚園や保育所の門をくぐらないこれらの「本」について、考えてみることに致しましょう。

◆幼児向け絵雑誌について

幼児向け絵雑誌「たのしい幼稚園」「よいこ」の類は、現在六種類ほどが毎月発行されます。それ以外に、テレビの人気番組「バーマン」とか「ウルトラセブン」などをその都度テーマにした絵本が月刊で出ています。これらは、出版社から幼稚園・保育所へ直通の月刊保育絵本とは異なり、すべて毎月店頭で売り出されるわけです。

左の表は、五種類の絵雑誌の十二月号の内容です。

総頁数	母親の頁	テスト	童謡	あそびなど	しど	絵	ば	な	し	マ	ン	ガ	A (3~6歳)		
													題名	所要頁数	
118	11	10		あそび・観察など		ギリシャ童話	ギリシャ童話	ギリシャ童話	イソップ物語	ひょうたんじま	くろみちゃん	・ウルトラセブン ・ひょうたんじま	ジョー90 鬼太郎	・けろよん ・鉄腕アトム ・あかねちゃん ・とさくらちゃん ・ゲゲゲの鬼太郎	所要頁数
92	24	6		あそび・工作など	しつけシリーズ				クレーくん	デイズニー 映画物語 名作劇場			ドナルド インディアン ぼうや	所要頁数	
160	28	8		観察・あそび 工作など					アンデルセン 童話	・チャットくん ・えみけんちゃん ・さよなら ・じゅりい		ウメ星デンカ	・パイマン ・もんがあちゃん ・たまねぎ ・たまちゃん	所要頁数	
124	25	6	有名幼稚園 入園テスト集	しつけ・観察 ちえあそびなど	じんぐるべる	日本昔話 ひろすけ童話	まみいちゃん やさいの もちつき	・ほびとくん ・ほびとくん ・けろよん ・けろちゃん ・怪奇大作戦				ウメ星デンカ	・オバケのQ太郎	所要頁数	
74	13		ふたあつ	しつけ・観察 あそびなど	はとぼっぼ ことりのうた もしもし はいはい ふたあつ		ちかてつ ソ連童話	・ダットくん ・とっぽ ・じーじ ケロちゃん ケロちゃん ひみつの ちかてつ ソ連童話				ウメ星デンカ		所要頁数	

(・印はテレビ番組と同一題材のもの)

こうしてみると、月刊絵雑誌の3/4以上を占めているのがマンガと絵ばなしです。マンガと絵ばなしの中には、ちよっと区別のつかないのがあって、「つづきマンガ」とか「つづきえばなし」とか銘打たれています。が、一体何か基準があるのかどうか、誌面からだけではうかがい知ることのむずかしいものも少なくありません。

一つ例をあげてみましょう。どちらにも、テレビの子ども番組をもとにしたものですが、テレビのは動画や人形ではなく、俳優が演じている劇です。二冊の絵雑誌面で、それを各々別の人

の絵を描いて、一つは「てれびまんが」、一つは「つづきてればえ
ばなし」と記されています。一頁が大体二こまに区切られてい
て、各々のコマに絵と短いことばが納められています。ことば
は、どちらもマンガの「ふき出し」ではなく、片方は会話である
ことを示す「」つき、片方は「」のない文章です。次に、そ
の各コマに入れられたことばを比較してみましよう。

A		B	
① あつ、さおり ちゃんが おおかげに さらわれて いく	② まてっ ぐわっ	① 「かいじんが なんでも こおらせる こうせんじゅ うで あばれて いるぞ」	② 「ややっ じどうしゃと うんてんしゅ うが こおった」
③ かがみで ひを おかえしだ	④ ごめんなき もうわるいこ とはしません	③ 「よし かいじんを やっつけよ う」	④ 「かいじん みずをかけ てやれ それ」
⑤ あれれっ 「びびび」	⑥ 「ばんぎあい かいじんをこ おりづめにし たぞ」		

(①は第一のコマの意味)

AとBのどちらが、マンガで
どちらが絵ばなしなのが、区別
がつくでしょうか。どちらも物
語というほどの内容もなく、区
切られた「こま」こまに単純な
説明が会話スタイルでつけられたもの、内容も似たりよったりで
す。

無理に考えれば「まてっ」「ぐわっ」などという文字のつけ方か

ら、Aの方がマンガかしらと思いたくなるのですが、ここではA
が「つづきてればえばなし」となっていました。

ですから、編集者の側では絵ばなしもマンガも一しょくたにし
て、とにかく子どもの興味を引きそうな材料に絵をつけ、簡単な
文字をつけてどんだん頁を埋めていくことを考えている、とみて
よいでしょう。

とにかく幼児向けの本ですから文字だけの頁というのはなく、
各頁が必ず絵と文から成立っています。そして、一つの題材が平
均四頁を占めていて、それが一頁に一つの絵と文の場合もあり、
一頁が二こまか三こまに区切られていて、そのこまごとに絵と文
の入っているものもあるわけです。そんな作品が一冊に九つぐら
いずつ並べられているのですから、子どもの前に、入れかわり立
ちかわりいろいろな「絵と文の頁」が現われる、ということにな
ります。

これら「絵と文の頁」の中の半数近くが、テレビの人気者をそ
のまま紙の上で活躍させています。「ダットくん」や「けろよん」
などは、三冊に登場していました。

こうみでくると、この「絵と文の頁」は、何ら独自の主張や方
針を持たず、ただ子どもの瞬間的な興味を満足させるものだけを
よせ集めて、極めてイーजीに編集されている、といわざるを得
ません。こういう本から子どもたちの何が養われていくのでしょ
うか。

おとなが週刊誌を読みすてにすると同様に、これら絵雑誌は幼児の読みすてにする「本」なのだ、というみかたをすることもできます。余り意味のない、無目的な娯楽雑誌を幼児がたまた見たからといって、そんなにむきにならなくともよいではないか、という考え方もあるでしょう。しかし、幼児期の大切なエネルギーを、そんな使いすてにするような材料とかわり合うことで、僅かでも浪費させてしまうのは、いかにももったいないことに思えます。

幼児が「本を読む機会」は、特別の本好きの子どもを別として、それほど多くはありません。幼児の興味は、もついろいろな、身体を使い、ものを使ってする活動的なあそびに向けられています。従って、たまに「本を読む機会」は、「貴重な機会」として、より大切にしなければならぬではないでしょうか。

各絵雑誌が設けている「テストの頁」「母親向けの頁」は、月刊保育絵本が「六領域に分けた編集」などによって保育者におもねっているのと同様、母親におもねって子どもを軽視した現われとみることができません。「育児相談の頁」など、その頁一つ一つをとってみれば、各々に有益なことが書いてあるのですが、子ども向けには無目的のいろいろなものをよせ集めておいて「テスト」や「育児相談」で母親の教育意識を満足させる、といった編集態度に「この本は誰のために作られているのかしら」と首を傾げざるを得ないのです。

◆単行本「マンガ」

絵雑誌のマンガの頁だけではなく、マンガの単行本も幼児とかわり合いを持つことがあります。「鉄腕アトム」「ゲゲゲの鬼太郎」「怪物くん」など、わざわざ買って与えるおとなは余りないのですが、床やさんや病院の待ち時間に、このような本のとりこになる場合が、年長児には見受けられます。

床やさんが混んでいる時「ママ、僕一人で大丈夫だよ。後で迎えに来てね」と母親を帰す幼児のききわけのよさが、実は床やさんのマンガシリーズを読破する楽しみからだったりして、苦笑させられることがあります。

これら子ども向け単行本「マンガ」は、ストーリーマンガと呼ばれていて、おとな向きマンガとはちよつと異なった性格を持っていきます。おとな向けマンガは本来は一枚の画面で社会や人生を諷刺するもの、として出発し発展してきました。フランスのドオミエとか、日本の鳥羽信正がマンガの祖といわれるのはそのためです。それに対して、子ども向けマンガは、物語を展開させるのにおもしろい画面を使う、という性格で発展してきました。日本の場合でいえば、紙芝居の人氣から絵物語雑誌が生まれ、それが飽きられる頃、ストーリーマンガが代って登場してきています。

そして、殊に昭和二十年以降の子ども向けマンガは「笑い」の要素よりも物語性重視の傾向がますます強くなっています。「鉄腕アトム」で代表される手塚治虫の医学生時代のアルバイト作品に、「罪と罰」のような本格的な小説をストーリーリーマンガ化したものがあります。これなどは、戦後のマンガが笑いをはなれて、物語に密着していった姿勢を示す典型的な例でしょう。

従って、単行本「マンガ」を読む子どもたちの興味は、一こまの絵のこっけいさや、気の利いた文句のおもしろさにはなく、物語自体の魅力にあり、その物語がいかに少ない努力で理解できるか、にかかっているのです。現代の子どもにとって、マンガの魅力は、①冒険やスリルや怪奇にみちた物語が展開する。②わかりやすい。③文字が少なく読む努力が不要。④活動的。⑤絵

(①は第一のコマの意味)(は吹き出し)

① それからの 天馬博士は きちがいじみて きました。	② 飛雄!! わしはおまえを ロボットに 生まれかわら せてやるぞ。 もう二度と死な ないからだに 作つてやるぞ。 ワハハハハ
③ 科学省 よりぬきの技師と 学者が、集められ ました。	④ 飛雄!! わしはおまえを ロボットに 生まれかわら せてやるぞ。 もう二度と死な ないからだに 作つてやるぞ。 ワハハハハ
⑤ (文字なし)	⑥ 飛雄 そつくりの ロボットの 作られ始め ました。
⑦ (文字なし)	⑧ (文字なし)
⑨ ビビビビ ビビビビ ビビビビ できた!! できたぞ。 ウハハハハ	

がおもしろい。⑥テンポが早い。ということになりました。

さて、それではこれらの単行本を開いてみましょう。

次に掲げるのは「鉄腕アトム」のある頁です。(上図)

アトム誕生の場面ですが一頁が九つのこまに区切られていますから、一こまの絵と文字は小さく、漢字も多く使用されていて、幼児には読みこなせそうもありません。

次のは「ゲゲゲの鬼太郎」のある頁(下図)です。鬼太郎たち妖怪が佐渡ヶ島に集まって、妖怪ラリーを催し、ねずみ男というのが実況放送をする場面です。

この本では漢字は全部ふり仮名がついています。ただ、内容が皮肉と諷刺に富んでいて幼児の理解の範囲ではないようです。

この種の本は、もともと幼児向けに作られていないのですか

① ゴトン ゴトン	② あつびりは中国 代表です。 片手に ハンドル 片手に 毛沢東語録を たずさえて おります。
③ 勝敗は 気にしてない もようであります。 毛沢東語録 どおりに レースをすれば それで 満足のもようです。	④ あつ びりです。 先頭の ペアー 川に はいました。
⑤ 妖怪は 人間の 作つた もろものが 伝統で ございます。	

ら、幼児に不適當なのは当然ですが、しかもこれらが幼児たちにとって、十分に魅力的であるとすれば、その秘密はどこにあるのでしょうか。

それは、文字をたどらなくとも、あるいは読んでもらわなくとも、一こま一こまの絵を目で追っていけば、ある程度ストーリーがわかるように、巧みに画面が構成されていること、たどったストーリーが幼児を満足させるだけのスリルとおもしろさに満ちていること、などにあるようです。何しろ、単行本「マンガ」は、絵雑誌のマンガのようにこま切れではなく、物語が納得のいく形で完結しています。アトムならアトムに専念して、アトムに関しては満ち足りた思いになれるのです。

絵雑誌の雑然性に比して、単行本「マンガ」は専門書であり、一つのテーマ、例えばアトムの超人ぶりを、徹底的に追究してみせてくれる「よさ」があるのです。

こうみえてくると、単行本「マンガ」によせられる幼児の興味は、オリジナルな物語絵本への興味と著しく接近しています。よく読めないのに単行本「マンガ」に熱中する幼児の姿は、物語絵本へとその子どもを誘導する時機の訪れを、私どもに知らせている、とみることもできましよう。

ところで、先に引用した例にもみられたように、マンガの文字は幼児にとって必ずしも読みやすくないのですが、くり返し、使われている「ややっ」「ぐえっ」「ガオーッ」「びびびび」な

どの嘆声や擬音は、文字を覚えかけた幼児にとって、すばやく読みこなせ、読むと同時にその意味が理解できる、数少ないことばでしょう。文章を読ませると、「そ・れ・か・ら、ふ・る・い・ふ・う・し・や・は」などと一字一字捨い読みする子どもが、怪獣の叫び声やロボットの動く音は、「ガオーッ」「びびびび」と一瞬に読んでしまいます。これも、マンガの魅力の一つでしょう。

自分で文字を読みたい意欲の少し出てきた幼児にふさわしい本、すなわち、文字が少なく読みやすくてきていて、しかも「赤ちゃん絵本」的な単純さではなく、起伏に富んだ物語性を持つものが、より多く用意されなければ、この子どもたちのマンガへの興味は徐々に高まり、将来のマンガ愛読者が育っていくことになりそうです。

単行本「マンガ」に興味を示す子どもの存在から、私どもは、幼児向け絵本を作る場合、あるいは選ぶ場合に、見落されがちな一つの立場が警告されていることに、気付かねばならないでしょう。

◆児童文化の二重性の克服

明治期以降のわが国の子どもたちは、学校文化と市井の文化という二重構造の中で生活を余儀なくされている、といわれます。例えば、学制施行直後の公教育は、ひたすらに欧米文明の移入に

忙しく、教科書も翻訳もの、お話の材料まで翻訳にたよるといった状態でしたが、庶民の子どもたちは学校から帰れば、伝統的なわらべ歌やあそびを楽しみ、昔ながらのおとぎ話や錦絵の世界に生きていました。

大正期には、余りに童心の涸渇した国定教科書や文部省唱歌に對して、無垢で純粹な童心をたからかに歌おうという動きが、教室外の文化人や芸術家の間で起こりました。いわゆる「赤い鳥」に代表される児童文化運動です。これは、綴方や自由画の指導に着手したこともあって、学校教育へかなりの浸透を見せたのですが、間もなく退潮しました。

次いで、童心主義のひ弱さを否定して新しく起こったプロレタリア主義児童文化は、これは当然、当時の文部省の下の学校教育とはあい入れないものとして排除されました。それに、プロレタリア児童文化の余りにも過度な思想性が現実的には作品の不毛ともなって、子どもたちの興味は「おもしろくてためになる」娯楽文化財へと傾斜していきました。大衆的児童文化の圧倒的勝利というわけです。

そして、教室の外では、大衆的児童文化と芸術的児童文化の懸念なたたかいがくり返されたり、あるいは両者の歩みよりが考えられたりしていますが、校門の中ではそれらの動きとは無関係に、文部省式教室文化が優勢を誇っている、というのがいつの時代にも変わらない一つの傾向としてみられます。

従って、子どもたちは、音楽室で歌う歌と家へ帰って歌う歌、図書室で読まされる本と貸し本屋から借りてきて熱中する本、といったように二重の文化とかわり合って生活しているのです。

ところで、幼稚園だけは外との断絶の少ない教育の場だ、と考えられてきました。翻訳教材に頼った明治初期は別として、大正期の優れた指導者は、「幼稚園は子どもの生活する所であり、子どものむらがり遊んでいる町かどに出かけ保育することこそ理想である」とまで主張しているのです。子どもが自然のままに遊んでいる状態から教育をスタートさせよう、という姿勢は当然、幼稚園と外の世界とに壁を設けさせなかったのです。

にもかかわらず、子どもの周囲では、いつの間にかまた、「幼稚園文化」とでもいいたい独特のものが作り上げられ、保育者たちがそのからの中にとじこもってしまいそうな気配が見られます。その一つの現われが、ここで考えてきた「幼稚園の門をくぐらない本への無関心さ」ではないでしょうか。

幼児の生活する場が、壁で仕切られた二つの文化圏にまたがっていたり、幼児の享受する文化財が「園の教材」と「園外の娯楽材」というように、はっきりと色分けされているのは余りにも不自然なことと思えます。幼児のもっている貴重なエネルギーと時間、いつ、どこでも、より有効に用いられるためには、私どもの関心を園外の文化へと、今少し向けてみる必要があるのではないのでしょうか。

(十文字学園短期大学)